みつける

１分間その場所で目を閉じてみましょう。２０分、その場に座ってみてもいいでしょう。６０分まちの中を歩いてみてください。感覚を研ぎ澄ますと、今まで何気なく歩いていた道が、いつもと違うように感じられませんか。

「みつける」は、普段の暮らしの中で無意識に接してきた感覚環境に注意を払い、気づく段階です。感覚環境を理解する一番の近道は、実際にまちに出て、様々な感覚を体感することです。

でもその前に、音・かおり・光・ねつといった感覚要素の基本的な特徴を理解し、感覚のスイッチをオンにする方法を知っておかなくてはなりません。感覚のスイッチがオフになっていては、せっかく豊かな感覚環境の場面に遭遇しても、気づかず通り過ぎてしまうからです。

感覚について理解できたら、実際にまちに出て、音・かおり・光・ねつなどを意識してみつけてみましょう。その時、まちの中ではそれぞれが関連しあい、しかも時の移ろいの中で刻々と変化していることに注意が必要です。

みつけた感覚は、絵やことばにして記録しておきましょう。これらの情報は、機械で測定した数値情報ではありませんが、あなたの“感覚環境のモノサシ”を使って測った、まちの感覚環境の状態を示す貴重なデータになります。

音

「音」はモノやカタチにならないからこそ、人の感性や、記憶に強く訴えかけ、空間の印象や質の豊かさを左右します。そして、その良さは、単に聞きやすいかではなく、そのまちの文化的・社会的状況にふさわしいかが重要です。

よりよい音環境を実現するには、まず音環境の実態を知り、感じ直すこと。その上で、望ましくない音の防止に加え、音の遺産・物語といった音の背後にある魅力や価値を再発見し、それらをいかしていくことがが求められます。

音環境の成り立ち

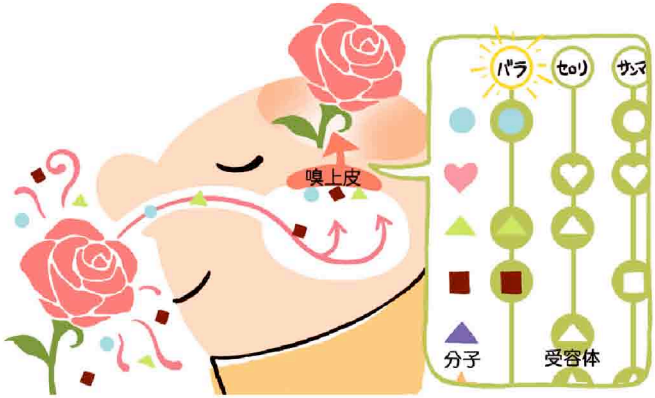
分類	特性
基調音	持続的に聞こえている、音環境の「地」となる音。
信号音	信号、合図としての機能をもち、音環境の「図」となる音。
標識音	ランドマークに対応するまちを象徴する音。人々から尊重され、そのまちらしさを担うとみなされる音。
騒　音	他の音をかき消し、その環境の社会的・文化的状況にそぐわない、人々から「望ましくない」と判断される音。

聞こえる音をその特性で分類すると、音環境の全体像が理解できます。

かおり

「かおり」は、地域の自然や人間の営みの副産物であり、まちに馴染んだ独特のかおりはそのまちの個性です。そして、育った環境・文化・経験の違いで好みが大きく左右され、また、記憶や感情と深く関わっていることも特徴です。

よりよいかおり環境を実現するには、まず日常的に意識してかおりにふれ、感じたことをことばで表現すること。そして、まちの自然・歴史・文化に関わるかおりを、まちの個性として積極的にいかしていくことが求められます。



かおりを感じるしくみ

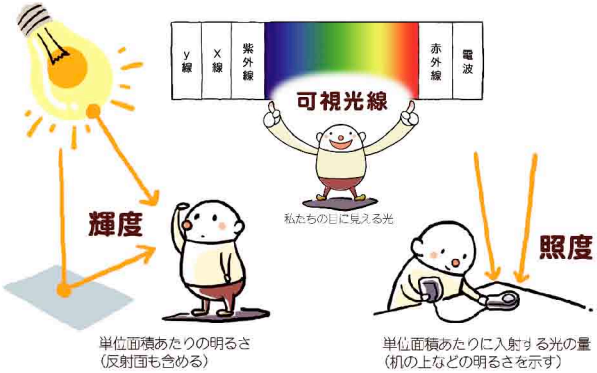
まちのかおり（寺町の線香）

自然のかおり（梅の花）

光

「光」は視環境の源泉であり、ものの見え方を大きく左右します。特に、光の量については「照度」でなく、従来おろそかになっていた「輝度」による、感じる明るさ・暗さの演出が重要となります。

よりよい光環境を実現するには、光の無駄使いをやめ、量から質へその意識を転換すること。そして、陽光や灯といった自然光から、良い光の原点を学ぶこと。そして、それぞれのまちの歴史・文化・風土・人々などの個性を、光によって表現することが求められます。



光に関わる大切な要素

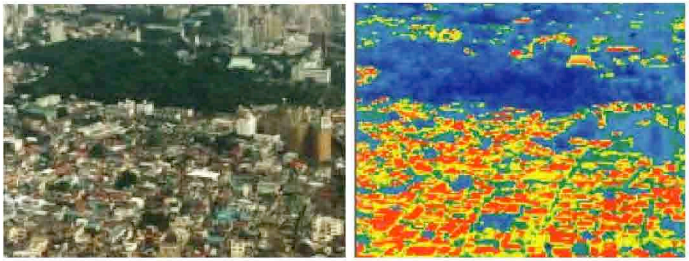
まちの個性となる光（左：ならの燈花会/右：南の島星まつり）

ねつ

「ねつ」は、気温だけでなく、湿度・風速・放射（下図参照）が影響します。太陽の光を浴びて蓄熱した道路やビルからの放射と、エアコンの室外機からの廃熱が、都市をさらに熱くしています。

よりよいねつ環境を実現するには、風や緑、打ち水などといったの自然な方法でその緩和を試みること。そして、エアコンに頼らずに快適に過ごすため、四季折々の衣・食・住の文化を改めて見直し、それらをまちの個性として積極的にいかしていくことが求められます。

放射のイメージ

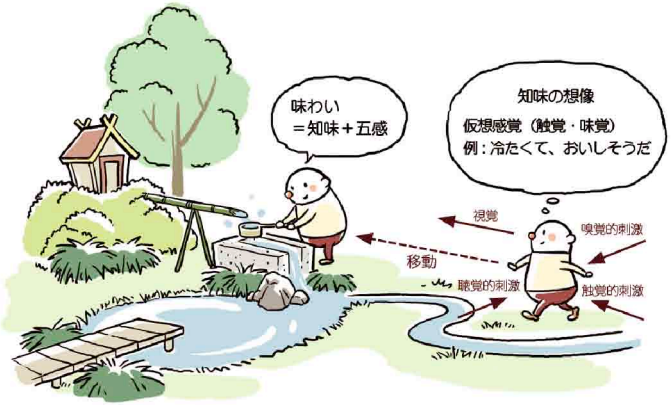


建物の屋根が高いのに対し、森の温度が低いことがわかります。
（資料提供：東京工業大学・梅干野晃教授）

複合化

音・かおり・光・ねつといった感覚要素は、実際のまちでは、互いに関連し合って存在しており、場の心地よさは、感覚の複合ワザから生まれます。また、ある感覚が別の感覚を連想させたり、感受する側の気持ちにも左右される、複雑で繊細なバランスの上に成り立っています。

複合的感覚をまちづくりにいかしていくには、感覚環境の複合化が成功している“いい感じ”の場所をじっくり味わい、その構成要素や相互関係など、いろいろな角度から探る必要があります。また、俳句などで情景を切り取ったり、時間の変化で移ろいを感じたり。要素間の相乗効果をとらえ、あるいは”いい感じ”の拠点を発掘・創造し、地域全体とのかかわりや変化を見守っていくことが求められます。



感覚の複合化の例（「名水体験」食文化の風景学/小林享より作成）